

支 部 長 挨拶

1998年5月に行われました日本気象学会北海道支部の役員選挙およびその後に開催されました支部理事会において、これまで4年にわたって支部長を務められた菊地勝弘先生の後を引き継いで、第21期の支部長に推薦されました。まずは、前支部長の長年のご労苦に感謝を捧げ、今後、新役員の方々と協力して、当支部の発展のために尽力したいと思いますので宜しくお願いします。



さて、昨年度の当支部の大きな課題でありました札幌での秋季大会は、前菊地支部長の陣頭指揮の下、役員や会員諸氏の協力を得て、352研究テーマと627人の参加で、かつてない盛会裡に開催する事ができました。ここに改めて関係者に感謝を申し上げます。また、第15回夏季大学では、地震、季節や暦、酸性雨、大雪などについての講座を用意し、大変好評でした。さらに、10月には特別気象講演会として、ベルリン自由大学のラビツケ教授による「熱帯、亜熱帯上部対流圏-下部成層圏における11年太陽周期の影響」が、持たれました。

次に、本年度は、すでに第16回夏季大学を去る7月29、30日に開催し、気候、オゾン、流氷、地震と幅広い講座の他、例年どおり札幌市青少年科学館および札幌管区气象台の見学会を設けました。約60名の受講者がありました。講師および関係者に謝意を表します。この10月には、苫小牧市の全面的な支援を受けて、「苫小牧周辺の気象と樽前山」を大テーマに、気象講演会を開催するべく準備を進めております。

21世紀を目前にして、今、国の行政の在り方が問われており、関連して国の研究機関や大学などの役割や運営形態の見直しも行われております。気象学という学術研究の意義について国民の一層の理解や支援を得るためには、研究の推進と同時に、今まで以上にその成果の地域社会への多様な還元が強く求められているように思います。支部会員諸氏の積極的なご協力と取り組みを期待いたします。

日本気象学会北海道支部
支部長 古川 武彦
(札幌管区气象台長)